

1 郷土素材の教材化について

私たちの郷土には、特色ある自然や文化、伝統、歴史、産業などがあり、また、それらにかかわっている人々がいる。それらのすべてが郷土素材であり、中には学校教育で取り扱う価値のある素材が多く含まれている。郷土素材の教材化とは、そのような無数に存在する郷土素材の中から、その教育的価値を見出し、保育や学習指導の中で目標の達成のためにその活用が効果的であるかどうかを十分検討し、年間指導計画の中に位置付けることであると考えられる。ただし、何でも扱えばよいということではなく、郷土を特徴付けており、取り扱うことで教育的効果だけでなく、郷土のよさを理解させることにも有効な素材であることが必要である。また、「郷土」の示す範囲は、対象となる幼児児童生徒の学年等の段階によって異なる。幼児から小学校中学年までの児童については、幼稚園や小学校が設置されている校区や市町村が中心となるであろうし、小学校高学年から中学校では、鹿児島県全体に広がっていくと考えられる。

2 郷土素材の教材化の進め方

郷土素材の教材化に当たっては、何のために（目的）、どんな幼児児童生徒に（実態）、どのような方法で（活用の仕方）、いつ（適時性）与えるかについて十分検討していくことが必要である。

これらのことを踏まえ、教材化の手順を述べる。

(1) 郷土素材を知る。

教師自身が地域に目を向け、郷土関係の資料による調査、地域の行事や祭りへの参加等を通して、郷土に伝わる遊び、踊り、音楽、美術、食などには、どのようなものがあるかを把握する。

(2) 郷土素材の価値分析を行う。

郷土素材について学習指導要領や幼稚園教育要領を基に、教科指導や保育の視点から価値分析を行う。

(3) 郷土素材に対する経験やレディネスなどの幼児児童生徒の実態をとらえる。

郷土素材に対する幼児児童生徒の知識や経験は、どのようなものであるのかを把握する。

(4) 郷土素材の価値と教科の目標や内容、保育では領域のねらいや内容との関連を確認し、単元（題材）や環境構成を検討する。

教科指導においては、(2)で分析した郷土素材の価値が、基礎・基本を定着させ、目標を達成させるのに適しているかを確認し、児童生徒の実態を考慮して効果的な学習指導ができる単元（題材）を構想する。

保育においては、その郷土素材が具体的なねらいを身に付けるのにふさわしい素材かを確認し、幼児の姿を予想して適切な環境構成を工夫する。

(5) 構想した単元（題材）や保育内容を年間指導計画に位置付ける。

郷土素材を生かした単元（題材）や保育内容を年間指導計画のどこに位置付け、どのように展開するのかを検討する。

3 郷土素材を活用した保育，学習指導を進める上での配慮事項

(1) 郷土素材を活用した保育

幼稚園教育は、遊びを中心とした生活を通して、一人一人に応じた総合的な指導を行うことを基本とする。そのために教師は、計画的に環境を構成し、幼児一人一人の行動の場面に応じて、様々な役割を果たしながら適切な指導を行う必要がある。

また、幼児の生活は、家庭、地域社会、幼稚園と連続的に営まれるものであることから、幼稚園生活を考えるに当たっては、このことを大切にしなければならない必要がある。

以上のようなことから、郷土に親しませる保育を進める際は、幼児の発達に意味のある体験を多様にしていくために、郷土素材の「何」を「どう生かすのか」という二つの視点で指導計画を見直し、継続的、長期的に幼児の活動を見守り、援助していくことが大切である。

このよう考えに立ち、郷土素材を活用した保育を進める上で配慮しなければならないことを述べる。

ア 指導計画の作成に当たって

(ア) 幼児が対象とじっくりとかかわるように、時間的なゆとりのある指導計画を組む。

(イ) 応答性のある環境構成をすること。

イ 具体的なねらい及び内容

(ア) それぞれの活動において 明確に設定して郷土素材を取り入れた環境構成を工夫すること。

(イ) 幼稚園生活における幼児の発達の過程を見通し、幼児の生活の連続性、季節の変化などを考慮すること。

ウ 郷土素材の選定

(ア) 幼児の発達に即して幼児期にふさわしい生活を展開し、必要な体験が得られるような郷土素材を取り入れること。

(イ) 幼児が自らその環境にかかわりたいという意欲を大切にし、試行錯誤して環境へのふさわしいかかわり方を身に付けさせるような郷土素材を選定すること。

(ウ) 幼児の興味・関心や発達や能力などに応じた遊びの中で、自分から十分に体を動かす心地よさを味わう体験を積み重ねて、友達とかかわって展開できる素材を選定すること。

(エ) 郷土素材の対象とかかわり、自分なりの言葉や表現で自己を表現する喜びを味わわせ、地域への愛着の芽生えを培うようにすること。

エ 環境構成の工夫

(ア) 幼児が心を揺り動かし、満足感・充実感・達成感を味わい、かかわりたくなるような魅力的な環境をつくり出すこと。

(イ) 園内だけでなく、園外の自然・施設・人材も視野に入れた環境の構成を工夫すること。

(ウ) 教師自身が地域に伝わる遊びやわらべ歌・昔話などを知り、そのよさを理解して、継続的にかかわれる環境を構成すること。

(2) 郷土素材を活用した学習指導

児童生徒が自ら進んで学習活動に取り組む態度を育成するためには、児童生徒自らが、自分の生活の中で、郷土素材にかかわり、課題意識をもって追究できる学習内容を設定する必要がある。

このような考えに立ち、郷土素材を活用した学習指導を進める上で配慮しなければならないことを述べる。

ア 興味・関心をもって、意欲的に取り組めるような教材提示の仕方を工夫をする。

児童生徒の住む地域の実態に応じた教材であるかどうかを、十分に検討するとともに、視聴覚機器を活用したり、地域の伝承者の話を紹介したりするなど郷土素材に対する興味・関心を高められるような教材提示の仕方を工夫する。

イ 学ぶことの楽しさや成就感を味わえるようにする。

教科における基礎・基本をしっかりと身に付け、郷土のよさを味わうことができるようになるには、郷土素材を活用した学習指導において、学習する楽しさやできたという成就感を味わえるようにする教師の働き掛けが重要である。

郷土素材を活用した学習の展開に当たっては、児童生徒にとって達成可能であるかを十分検討した上で児童生徒が熱心に取り組めるような活動を設定することが大切である。また、児童生徒一人一人がじっくりと創意工夫を生かしながら取り組めるように、問題解決的な学習や興味・関心等に応じた学習を展開するようにする。

ウ 地域への思いや願いを広げ、深めるようにする。

児童生徒は、地域社会とかかわりをもつことで、郷土に対する思いや願いを広げ、深めていくことになる。郷土素材を活用した学習を終えたとき、さらに、家庭で実践する、地域の行事に参加する、伝承活動に加わるなど積極的に地域にかかわろうとする意欲を高められるような教師の働き掛けを工夫する。

エ 家庭・地域社会との連携を図る。

子どもの数が減り、地域でのつながりが希薄になるにつれ、人と人とのかかわりの中で学ぶことが少なくなっている。そこで、家庭や地域社会と学校が連携を図りながら、児童生徒が自ら進んで活動できるよう工夫する必要がある。地域の方々を学校に招待したり、訪問して仕事や活動の様子を見聞きしたりするなど直接交流する機会を設定したり、郷土素材についての事前の取材活動を行い資料を準備しておくなどの工夫が考えられる。

また、取材や活動に協力していただける方については、了解を得た上でリストを作成する。

オ 年間指導計画への位置付けをする。

教科指導において、郷土素材を活用した学習指導を系統的に、継続して行えるようにするためには、単元（題材）の実践を通して基礎・基本がしっかり身に付いているかを見取り、目標設定や指導上の課題を明確にして年間指導計画を改善していくことが大切である。